

理事長所信

常滑青年会議所 2023年度
第62代理事長 福田 祥久

<はじめに>

「このまちが好き、ずっと住み暮らしたい」

この想いを胸に私自身青年会議所活動をしていきたいと考えています。

1949年、明るい豊かな社会の実現を理想とし、責任感と情熱をもった青年有志によって日本でも青年会議所運動が始まり、その運動は全国各地に伝播していきました。1962年、常滑の地でも、現在の社会を我々青年が中心となり青年らしい方法で、より一層明るい社会にしようという理想のもとに、常滑の発展に最善を尽くしたいと46人の有志が集い、常滑青年会議所は設立し、今にいたるまで長きにわたり運動を展開してきました。

しかし、ここ数年の新型コロナウイルス感染症の拡大により、不要不急の外出が自粛され、様々な分野において制約が課せられるようになり、当たり前にあった伝統行事や交流も、非接触を強いられる環境になり、国民生活や経済活動を維持するためのICTの活用が急速に広がり、青年会議所の運動も変革を求められる状況となっています。

それでも、設立から受け継がれる本質的に変わらないものがあると信じ、試行錯誤を重ねながら一歩ずつ進んでいます。

常滑市は、千年余りの歴史を有する常滑焼が育んできた風土や文化、南北に長い伊勢湾に面した海岸、豊富な農産物などの観光資源に恵まれています。商業施設として、中部国際空港セントレアをはじめ、2019年には愛知県国際展示場 AICHI SKY EXPO がオープンし、国内に限らず世界の玄関口として多くの来訪者を迎えられる環境にあります。

2022年（令和4年）～2028年（令和10年）までの7年計画で、第6次常滑市総合計画では、目指すまちの姿を「とことん住みたい 世界とつながる 魅力創造都市」と定め、まちの「安全」、「安心」、「成長」の3つの観点から、「2028年の常滑市」を想像してみようと、ビジョンをイラストに表現し、市民へのアプローチを行っています。

また、常滑市観光戦略プラン2022を打ち出し、ウィズコロナ・アフターコロナの時代に観光客から選ばれる観光地を目指しており、更にあいち・とこなめスーパーシティ構想の実現に向け常滑デジタル化推進宣言も掲げ、中部国際空港島と対岸部のりんくう町に最先端技術・サービスの導入を図り、ビジネスモデルを構築する計画が進んでいます。

そして、2023年度は、常滑市議会選挙もあり、常滑市が大きく変化する時期です。先を見据え目まぐるしく変化するまちに対し、行政の考えを身近に聞き、常に最新の情報を取り入れ、発信できる機会であると捉え、積極的にまちに関わっていくことが非常に重要であると考えます。

<青年会議所活動の浸透とメンバー間の関係性づくり>

青年会議所正会員は全国的に直近20年で会員数が半減し、現在の平均在籍年数は約4年、入会3年未満は約55%となっており、過去では時間をかけて育成できていたJAYCEEは、在籍年数が短いからこそ「理念」をしっかりと伝え共感することが急務です。

それでは、我々は社会に対して何をもたらず組織なのか？その答えは「JC宣言」にある「社会の課題を解決することで持続可能な地域を創る」と、現在は定義づけされています。社会の課題を見出す手法を、青年会議所活動から学び、価値ある活動へ繋げていく必要があります。

また、青年会議所運動の展開には、メンバー間の良好な関係性が必要です。メンバー同士が、互いにより興味関心をもち、常滑青年会議所という場所を通じて、同じ体験、経験をすることで共通の認識が生まれ、良好な関係性が育まれます。関係性を築ける機会をより増やし、共に成長できる場を創造していきましょう。

<まちを知り、市民と共に考え行動できる組織へ>

常に変貌を遂げ続ける常滑では、山車祭や盆踊り等、伝統的に行われてきた行事はコロナ禍で中止や延期に見舞われ、市内各地で関わり方は、多様な価値観により継続が困難なものも多く、昔からの風習や習わしの通りにはならず、柔軟な考え方をもち、常に最善を考え続ける必要があります。

その中で我々は、青年経済人として学び、行政をはじめ市民と関わり、まちの可能性を探り問題点や課題を把握しながら、互いに考え方や情報を取り入れ、共に影響力のある活動へ繋げることで、よりよい常滑を目指し、できることから一つずつ、継続的に意見交換や提言をできる関係性へと繋げる運動を創造していきましょう。

<情報共有が生み出す強固な仕組み・組織づくりへ>

コロナ禍に於いて、社会全体では10年進んだと言われる急速なデジタル化が起きました。また、昨今メンバーの構成も会社の代表者、役員よりも会社員が多くなる中、時間の取り方にも大きな変化が起きています。これまでの青年会議所活動の仕組みも、確固たる成長を促すシステムが確立されてきましたが、デジタルツールを活用することで更なる時間の創出が可能となり、より本質について考え語り合う時間に費やすことが重要であると考えます。

時代の変化に対応するJAYCEEへと成長するために、DX（デジタルトランスフォーメーション）を意識し、生産性を高めましょう。

さらに、考え方や発想が違うメンバーが活動に専念できる円滑な運営をし、経験したことを語り合う中で「成長の機会」をメンバーが掴み、目的達成に向けて一致協力する体験を通じて、当事者意識を持ったメンバーがより増える組織を目指し運営をしていきましょう。

<拡大から始まる繋がり>

会員拡大は日本全国の各地青年会議所でも大きな課題として挙げられています。少子高齢化・東京一極集中等、若者が実数として減っていることはもとより、現在では SNS の発展も手伝い、自身が繋がりたい、共通の目的のある人と直接的に繋がることが可能となりました。それに従い、より若い世代が軽薄な関係性しか築けず、関わるに値する魅力的な組織が減少していると考えます。

では、関わるに値する魅力的な組織とはなんのでしょうか。

それは、自身の利益ではなく他者への奉仕の心を持ち、興味関心を持って地域やまちの人のために、多くの繋がりを一致団結させ、自己満足で終わることなく目的達成のため力を注げる影響力のある組織だと考えます。

青年会議所は常滑市、知多半島、愛知県にとどまらず、東海地区、日本全国、世界中とも繋がるネットワークがあり、卒業しても業種間の繋がりを創出できる業種別部会もあります。

青年会議所活動の魅力の一つである「繋がり」をメンバー一人ひとりが体感する機会を掴み、様々な人を巻き込み、常に前向きな発言を意識して関わっていくことで仲間を迎え、まわりに大きな影響を与えられるメンバーがいる活気ある組織をメンバー一丸となって創っていきましょう。

<最後に>

なんとなく「このまちが好き、ずっと住み暮らしたい」と想っていた私が常滑青年会議所に入会させていただいたのは 2014 年、地元大谷の山車組である若い衆・消防団活動を通じて、何かを続けていれば自分が変われるのではないかと実感し始めたタイミングで先輩に声をかけていただきました。

常滑青年会議所で、初めて拝見する先輩、数多くある事業や忌憚のない意見の飛び交う理事会等の全てが新鮮で、新しい環境に順応するために必死でしたが、先輩諸兄姉が自身の信念・プライドを持って戦い、まちを想い成長・変化していく姿を目の当たりにし、共に創り上げることの楽しさを知り、自分もいつか責任ある役職を全うしたいと考えるようになりました。

そして、LOM で委員長を担う機会を頂ける事となり、全力でまちの人のことを考え、実行した事は今でも忘れられません。事業を終えたあと、まちの人、メンバーから多くの賛辞を頂き、より「このまちが好き、ずっと住み暮らしたい」と思いました。更には、多くの人に「このまちが好き、ずっと住み暮らしたい」と想ってもらえるようなまちを創りたいと決心したのもこの頃です。

また、ブロックアカデミー委員会に塾生として出向し、愛知県全域に同期の仲間ができました。LOM で理事を受け、共に役を全うした仲間ができ、多くの繋がりができました。一方で愛知ブロック協議会にスタッフとして出向した時や、LOM で専務理事、副理事長として活動した時は、今後を担う人たちに伝えることの難しさを痛感しました。繋がりの大切さ、伝える事の難しさを経験したことを、私に関わる人には絶対に伝えるべきと考えました。

62年の歴史ある常滑青年会議所の理事長の役に任せていただき、今まで培ってきた経験を元に、一つひとつ共に創り上げることの楽しさを共有し、取り組むことに対しての「理由」をメンバーへ「伝える」ことで、今後5年、10年と関わるメンバーが可能性を感じ、相手のことを考え共に助け合い、協力を惜しまず、魅力ある活動をひた向きに続けられる常滑青年会議所の未来を創造し、一年間全力で全うさせていただきます。皆様のご支援とご協力を切にお願い申し上げます。